

## 留学・研究計画書

氏 名	松田 妃佐子	留学機関名	タシケント国立東洋学大学
留学先国名	ウズベキスタン	留学期間	西暦 2008 年 8 月 ~ 2009 年 7 月
研究テーマ	「中央アジアにおけるイスラームの機能と現状—ウズベキスタンにおける聖者崇拝を事例に—」		
研究テーマの説明	(テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)		
<p><u>①研究の学術的背景</u></p> <p>何世紀もの間、イスラームは多様なエスニック集団が混在する中央アジアに穏やかな統合と秩序をもたらす“かすがい”として機能してきた。しかし、ソヴィエト政権による民族分離独立政策以来、それまでのイスラーム的秩序は息を潜め、名称民族を中核に据えたナショナリズムが新生国家を支える新たな理念となっている。そのような状況が中央アジアのイスラームにどのような影響を与え、また両者は現在どのような関係にあるのか。本研究はウズベキスタンにおける聖者崇拝を事例に、中央アジアにおけるイスラームの機能と現状を検証することを目的とする。</p> <p><u>②研究の射程</u></p> <p>ウズベキスタンにおいて独立以降再び盛んになった聖者崇拝に焦点を当て、“イスラーム復興”と“ナショナリズムの台頭”の両方向からその影響や関連性を検討する。</p> <p>基本的な教義さえ守られれば大幅な土着化も認めるというイスラームの柔軟な態応に起因し、その土地、土地でイスラーム化以前の伝統と結びついた多彩な文化が形成されている。</p> <p>そのひとつに、イスラーム世界の各地で盛んに行われている聖者崇拝がある。人々は聖者を祀る墓廟「聖者廟」を訪れ個人的な祈願を行う。厳格な一神教を唱えるイスラームの中で、異端的ではあるが人々の生活に強く根ざし、地方色豊かである。言い換えるならば、非常に“土地”との繋がりの強い伝統と言えよう。</p> <p>中央アジアは帝政ロシアの進出からソ連による社会主義体制を通してイスラームの破壊が最も進んだ地域と見なされていたが、近年では聖者廟への参詣が活発に行われるようになった。ウズベキスタンのブハラ郊外にあるナクシュバンド墓廟でも多くの市民が参詣する姿が見られる。その要因を①独立後の民族文化の見直しや伝統的な信仰への敬意の再燃、さらに政治・社会・経済の閉鎖的状況が人々を再びイスラームへと向かわせたことによる“イスラーム復興”の流れの中で捉えることができる。また、聖者崇拝の土地との繋がりを考えれば②ポストソ連時代の新国家建国を支える“ナショナリズム”の現れの一端として捉えることもできよう。</p> <p>この両者がどのように絡み合っているのか、このことは中央アジアのイスラームの歴史・現状・展望を考える上で重要なファクターであろう。現地に滞在し、聖者崇拝を含む人々の日常とともにあるイスラームの姿を真摯に観察・研究することでその一端を捉えられるに違いない。</p> <p><u>③学術的・社会的意義</u></p> <p>人々の日常を通して中央アジアの社会を捉える研究はあまり行われておらず、実施する環境も整っていなかった。それゆえに先行研究も少ない。そのような状況の中、現地から直接情報を提供する意義は大きく、中央アジアへの理解に少なからず貢献すると考えている。</p>			

# 成果報告書

記入日 2010年 4月 10日

氏名 松田 妃佐子	留学先国名 ウズベキスタン共和国	所属機関 タシケント国立東洋学大学
-----------	---------------------	----------------------

研究テーマ：「中央アジアにおけるイスラームの機能と現状

－ウズベキスタンにおける聖者崇拝を事例に－

留学期間： 2008年 9月 ～ 2010年 1月

留学期間の間、一体どれだけの人々と出会ったのだろうか。もはや数え切れな  
い。私は首都タシケントを拠点としていたが、頻りに地方に出かけた。地方のイン  
フラはタシケントとは比べ物にならないくらい悪い。それでも、たくさんの人生が  
そこにあった。生まれ、育ち、結婚をし、子供を生み、育て、やがて年老いて死ん  
でいく。初めは、なんて単純な人生なのだろうと思った。特に女性たちに自由はな  
い。この国どころか、一生この町からも出ないかもしれない・・・退屈ではないの  
だろうか。親と同じような人生を、親が決めた通りに生きる・・・不満はないので  
あろうか。



〈ナクシュバンディー教団のカドルの夜の儀式(コカン)〉

そんな人々とたくさん出会っていくうちに、私は人間の自由とは一体何であるのか、疑問に思うようになった。日本は豊かな国  
だ。自由がある。生まれてから死ぬまで、選択、選択の日々だ。ボールペンひとつ買おうと思っても、頭を抱えるほど選択肢があ  
る。自分で自由に選ばばいい。全ての選択肢を手にし、自由に生きることが出来る日本人はかも楽しく生きているかと思いきや、  
みな浮かない顔だ。次から次へと降りかかる選択肢の雨のなか、みな必死に最善の選択肢を選んできたに違いないのに、みなあま  
り幸せそうではなさそうだ。

彼女たちが我々日本人に比べ自由だとは言わない。私よりも年若くして、子供を3人も4人も抱え、読み書きのできない女性に出  
会った時、自由に学ぶ権利すら与えられなかった彼女の運命に、私は何とも言えない苛立ちと怒りを覚えた。（彼女自身が学ばな  
いという選択肢を選んだのかもしれないが・・・。）かと言って、彼女たちに比べ日本人が幸せだとも私は言えない。たくさん  
の子供を抱え、あやしなながら、初めて出会う日本人に目をきらきらさせて、あれを食べろ、これを食べろと、かも楽しそうにしてい  
る彼女たちを誰が幸せでないと見えようか。

私はこの時代に日本人として日本に生まれた。自分の人生を選び、生きている。しかし、結局人は「いつ、どこに生まれるか」は  
選ぶことができない。与えられた人生を、その状況に合わせ、生きていくしかないのだ。しかし、それこそが文化や価値観の多様性  
の根幹に違いない。人間は面白い。どこへ行っても誰かが住んでいて、それぞれの人生がある。異国の地に入り、多くの人々と出  
会う中で気づいた、「当たり前」のことだ。当たり前のことを当たり前気づかせてくれた、たくさんの現地の人々へ感謝である。

## 調査の概要

### 1. 調査の目的

明確な国境概念が持ち込まれる以前の中央アジアでは、イスラームが諸民族を緩やかに結ぶ「紐帯」として機能していた。そして、当該地域のイスラーム化に、スーフィー教団（イスラーム神秘主義教団）が果たした役割は極めて大きいことが知られている。しかし、ソ連期において人々の信仰は制限され、スーフィズムに関しては公式には消滅したとされた。（実際は、非公式に存続していたのだが。）

その後、ポストソ連期の中央アジア諸国では、国内に多数の民族を抱えながらも、名称民族を中心に据えた国家形成、国家統合が強力に推し進められている（例えば、ウズベク民族の地を意味する「ウズベキスタン」）。イスラームは、あくまで名称民族の伝統の一部として認められる枠内で評価され、政府の管理の下、国民国家形成を脅かす要素を排除した「公のイスラーム」が形成されている。しかし、その外ではソ連時代を生き延びたスーフィー教団が、異なる権威体系を築き、国境を越えた連携を再び取り戻しつつある。

報告者は、この2つの異なる権威体系が大きく重なる場所のひとつとして、スーフィー聖者の墓廟に注目する。ウズベキスタン共和国（以下、ウズベキスタン）領内に位置する聖者バハーウッディーン・ナクシュバンド（以下、ナクシュバンド）の墓廟を事例として、2つの権威体系が1人の聖者をそれぞれどのように位置づけているのかを見ていきたい。それにより、現代における「聖者廟」及び「聖者」の役割の一端を示すことができるとともに、未だ先行研究の多くない現代ウズベキスタンにおけるイスラームの現状について、少なからず明らかにすることができるのではないだろうか。

### 2. 調査内方法及び内容

本研究では、現地において論文、図書、新聞・雑誌等、さらに法律・条令など収集した。しかし、法律に関して言えば、施行の段階でかなり恣意的かつ流動的に扱われることが多く、表現活動に関しても極めて厳しく制限されている点を考慮する必要がある。加えて、ナクシュバンディー教団の内外の人々に数多くのインタビューを行った。政府と教団の関係は決して良好とは言えず、教団内での部外者に対する警戒心は極めて強い。また、現地においてもスーフィー教団をイスラーム原理主義者やテロリストと安易に結びつけることは少なくない。それ故、教団との接触に関し、所属大学からも強い反対や圧力を受けた。このような経験も含め、両者の微妙な関係、及びその重大さを身をもって感じる事となった。

#### (1) 人々の中の聖者ナクシュバンドとナクシュバンディー教団

ナクシュバンディー教団とは、1200年頃中央アジアに起こったスーフィー教団である。神をより深く、近く感じられるよう、教団員は日々様々な修行を行う。例えば、独特の修行法として、沈黙のズィクル（口に出さず、心の中で神を呼び続ける）やスフバト（議論を交わす）などがある。そして、それを創始したのが、教団名にも冠されているバハーウッディーン・ナクシュバンド（1318-89）である。ナクシュバンドはブハラ郊外のキャスレ・アーリファーンで生れ、没後同地に葬られる。彼の墓廟は「メッカに告ぐ聖地」とも現地の人々から評され、9世紀までイスラーム圏各地からの参拝者があった。しかし、ソ連時代に入り、スーフィズムへの厳しい弾圧の中、墓廟も荒廃していく。

現在、ナクシュバンドの墓廟には、国内、とりわけブハラ近郊から多くの参拝者が訪れ、様々なご利益を求めて祈願を行う。タシケントに暮らすムスリム住民の多くも、民族を問わず、時間や金銭的余裕があったら彼の墓廟に参拝したいと語る。これは、祈願目的というよりも、むしろナクシュバンドに対する尊敬と、この地に生まれたムスリムとしての義務感のようなものが強いようだ。しかし、タシケントから当該墓廟に参拝した多くの人は、イスラームに

対する寛容政策が採られたソ連時代末期集中しており、独立後は極めて少ない。これは、社会主義の崩壊による、移動手段や宿泊施設などの値上がりなどにより、遠方からの参拝者への負担が増加しているためと考えられる。

このように人々はナクシュバンドに対し畏敬の念を持っているにもかかわらず、彼が中興したナクシュバンディー教団に関しては一般にあまり良く知られていない。学校教育においても、初等教育7年生用の「国史」の教科書に、ナクシュバンドおよびナクシュバンディー教団について、「スーフィズム」というトピック中に数行触れられているのみである。

人々にとって、ナクシュバンドという名は、むしろ「手は仕事とともに、心は神とともに」という彼の遺した言葉とともに、民族を超えて広く人々に記憶されている。人々の中には、この言葉の意味を、（どれ程イスラーム法に従って生活しているかではなく）「神を信じる」思いの強さにより敬虔さは測られると解する人もいる。ソ連による長きに渡る信仰の制限により、表面的にはソ連的文化を受け入れながら、心の内では信仰を守り続けてきた人々にとって、この言葉は少なからず影響を与えたのではないだろうか。

現在、多くの人々にとって、聖者ナクシュバンドはその聖性からだけではなく、偉大なムスリムのひとりとして尊敬の対象となっていると言えるだろう。

## （2）政府とナクシュバンド廟

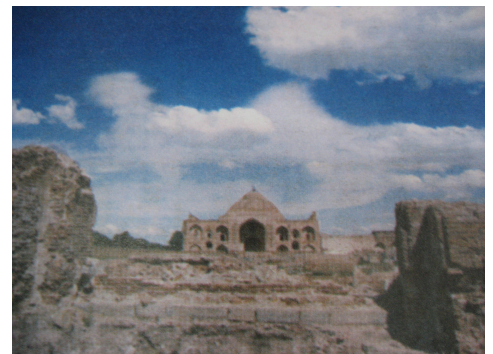
1991年のウズベキスタン独立以来、憲法第61条において、国家の宗教組織・団体からの分離、それらへの不介入が示され、原則として宗教に基づいた政治結社は禁止されている。独立当初から1999年のタシケント爆破テロまでは、ソ連とは逆にイスラームへの寛容性が積極的にアピールされていた。しかし、テロ事件以降、女性の宗教スカーフの着用が公の場で制限され、また大統領府直轄によりタシケント・イスラーム大学が創設するなど、政府によるイスラームに対する規制や影響力は強まる傾向にある。

ナクシュバンド廟との関わりで言えば、独立後、ナクシュバンド生誕675年にあたる1993年に合わせ、政府主導による墓廟、モスク、ハーンカー（教団の修行のための施設）の大規模な修復が行われ、またこの時期ナクシュバンディー教団に関する様々な図書も出版されている。1992年には、修復に貢献した者に対し大統領令により勲章が授与されている。これは文化・芸術・宗教に係る勲章としては、建国後第一号となる。その後、2003年に再び大規模な改修と区画整理が行われ、2度にわたる改修を経て、現在、一連の建物群はまるで新築と見紛うばかりの壮麗な姿となっている。また、2008年に出版されたウズベキスタン大統領イスラム・カリモフの著作では、当該墓廟について「中央アジアのみならず、全世界の真珠（宝）である」と表し、数ページに渡りナクシュバンドを称えている。しかし、あくまでウズベキスタンの偉人としての色合いが強い。

ソ連時代、多くの歴史地区が観光地として活用されたが、ナクシュバンド廟はスーフィズムの公式的な消滅にともない荒廃していった。一方、現行政府は独立後かなり早い段階から、当該墓廟に積極的に関わっている。荒廃した墓廟はまさにソ連による宗教弾圧の象徴であり、それをあえて取り上げることで、国民に対しイスラームの保護者として強力なアピールとなったのではないだろうか。さらに、国外に対してはイスラーム世界の広範囲に



〈ナクシュバンドの墓廟の裏空の風景。  
たくさんの墓が並ぶ〉



〈改修前の荒廃したナクシュバンドの墓廟〉

広まった巨大なスーフィー教団を中興したナクシュバンドを通し、新国家を長い歴史と広大な範囲に結びつけ、その存在感を現在のイスラーム世界に示そうとしたとも考えられる。政府にとってナクシュバンドの廟は、目に見える形で表すことに意義があった。それは聖者廟ありきの聖者であり、聖性よりもむしろ歴史の証拠としての「聖者」が求められたと言えるのではないだろうか。

### (3) ナクシュバンディー教団と聖者

現在も活動するナクシュバンディー教団の教団員にとって、ナクシュバンドへの尊敬の念は極めて強く、彼らを日々の修行に向かわせる力となっている。一方、彼の墓廟は、畏敬の対象ではあるものの、決してムスリムにとってのメッカのような、教団の中心的存在としては捉えられてはいない。それどころか、教団員の中には、墓廟のあるブハラ自体を、イスラームの力が弱まった地として悲観的に捉える者も少なくなかった。

そもそもナクシュバンディー教団において、「人」は極めて重要な要素であり、教団そのものが有機的な人的ネットワークの集合体といっても過言ではない。教団は複数のイシャー（導師）と多数のデヴォナ（直訳で乞食の意、イシャーの下で修行に励む者たちを指す）で構成されるが、全てのイシャーは同等とされるため、名目上教団において明らかな中心というものはない。（実際は、年齢や人望、誰の元で学んだかにより違いはあるようである。）また、重要な修行のひとつであるスフバト（議論）を行うため、デヴォナが複数のイシャーのもとを渡り歩くことも珍しくない。スフバトにはイシャーとだけではなく、デヴォナ同士、教団員ではない一般のムスリムや異教徒と議論を交わすことも含まれる。

イシャーの周りにデヴォナたちが集まってくるように、デヴォナたちの周りには、多くの勉強熱心な一般のムスリムが集まってくる。デヴォナたちは自身の仕事と礼拝の合間に、神学やアラビア語などを教えたり、様々な相談に乗ったりするが、決してお金を取ることはない。学生は10代から壮年まで、貧しい者から、企業経営者といった豊かな者まで様々である。教団だけでは完結しない裾野の広いネットワークが形成されて、政府が管轄するイスラームの権威体系とはまったく異なった体系がそこに存在していた。

ナクシュバンディー教団にとって聖者とは、過去に遡りながら、あくまで人と人との繋がりのおかげで行き着くことができる存在である。教団員たちは、ナクシュバンドも含め繰り返されてきたスフバトのつながりの中に自らを位置づけることができ、それはおそらく物としての墓廟よりもはるかに意義のあることではないのだろうか。

### (4) まとめ

ナクシュバンドの墓廟に対し、政府と教団は極めて異なった意味づけを行っていることが明らかとなった。このことは聖者やその墓廟が、単に聖性からばかり成立しているのではなく、時代によって、また状況によって様々な意味や役割が付与されうることを示している。政府にとっては墓廟ありきの聖者であり、教団にとっては聖者ありきの墓廟と言ってもいいだろう。それは2つの権威体系の根本的な差異であり、決して相容れない。2つの権威体系の安定化は、当該地域において経済的・社会的閉塞感が広がる中、ウズベキスタンのみならず周辺地域も巻き込んだ重要な問題であることは明らかである。今後、さらに様々な角度からこの両者の関係を見ていくことが必要となっていくのではないだろうか。